令和５年度一般入試個別学力検査【後期日程】「国語」

Ⅰ（配点 135 点）　出典：宮本百合子「心の河」

問題本文は、作品の全六章のうちの第三章の全文である。宮本百合子は、代表作「伸子」に自身の結婚の破局を描いたが、本作はそれに先立つ作品で、あるべき夫婦の姿を求めて悩む女性が描かれる。ストーリ―に大きな展開があるわけではなく、夫婦のやり取りを通して心理を読み取る問題で、丁寧に本文を追って行くことが求められる。限られた時間の中で丁寧に読み通すのは大変なことだと思うが、人物関係の把握や、文脈の把握のためにはどうしても必要なことである。設問に答える以前に本文が正しく読めていないと思われる解答もあった。日ごろの読書を通して、小説を読むことに慣れてほしい。

問一　Ａ　遠慮　　Ｂ　額　　Ｃ　漠然　　Ｄ　芸当　　Ｅ　諦
Ｄ「ゲイトウ」に間違いが多かった。Ｅ「アキラめる」の偏が糸偏になっているものが複数見られた。Ｄはなじみの薄い言葉なのかもしれないが、語彙を増やすことが漢字の学習にもなると思うので、たくさん本を読んで、多くの言葉に触れてほしい。

問二　①　さえぎ　　②　ざきょう　　③　つの　　④　みじ　　⑤　つや
よくできていた。②に少し誤答が見られた。

問三　さよが、夫婦の間のどのようなことに嬉しさを感じているかということを確認する問題。
（ａ）「そこ」は、具体的には直前の部分を指すことになるが、行為を抜き出すだけではなく、それはどういうことになるのかを説明してほしい。
（ｂ）「良人の満足を見て自分も好い心持になるという以上のものが、さよにはあった」とあるので、一つはすぐわかる。それ「以上のもの」をもう一つの嬉しさとして説明してほしい。
（ａ）、（ｂ）ともによくできていた。

問四　「何の稽古」という表現に込められている保夫の気持ちを説明する問題。直前に「気も乗らなそうに煙草の烟を吹いた」とあるので、気が乗らないという心境であるのはその通りであるが、その心境を「何の稽古」と表現している点に着目してもう少し詳しく説明してほしいというのが設問の意図である。「稽古」というのは、繰り返し続けてやらなければならない修練なので、それに伴う感情を思い浮かべてもらえれば説明できる。

問五　「酸いような笑い」に表れたさよの気持ちを説明する問題。前後のやり取りを読めば、保夫の答えが、さよの求めるものでないことがわかる。したがって、この笑いが決して肯定的な笑いではないことは明らかであり、その点についてはほとんどの解答が答えられていたが、直前の「いやな方！」という言葉もあわせて、何が「いや」だったのか、ま

た、「酸い」という感覚でしか伝えられないものを考えてほしかった。

問六　さよが、自分と夫とのやり取りをどのようにとらえているか、表現から読み解く問題。夫の答えが的外れであり、要点を捉えられていないことが述べられているというのはその通りだが、彼女が夫とのやり取りの中で夫に何を求めているのか、つまり、「的」・「要点」は何かということを踏まえて説明することが必要である。その説明に応じて配点した。設問より後に出てくる「返事は間違ってもよいから「お前のことだからこうでも思っただろう」というところから発足しなければ、焦点が合わない」という部分がヒントとなる。

問七　「幾分残酷なものにもなって来た」とはどういうことかを説明する問題。設問箇所のすぐ後の部分を引用して、「夫の性格が面白くないものであることがわかって来た」、「理想とする生活の幸福が期待できないとわかった」などの解答が多く見られた。それらも確かに残酷な事実ではあるのだが、そこに到達するまでの、会話をすればするほど、かみ合わずすれ違っていくという状況がすでに残酷である。そのような過程の残酷さに触れてほしかった。

問八　さよの発言の意図を説明する問題。さよの発言の中の、「幸雄さんに、伯母さんを早く安心させるもんだよっておっしゃるでしょう？」という言葉を、夫に対する発言の促しであると捉えている解答があったが、さよは、夫にこの言葉を幸雄に対して言ってほしいと思っているだろうか？　設問箇所の後の部分で、夫がさよの言葉に同意したことに対して、「何故そんな上っ面で安心？」という「歯痒い」心持を感じ、皮肉（夫には通じていない）を洩らしているところから、こんなありきたりのことを言ってほしいと思っていなかったと推察される。では、なぜわざわざ言ってほしいと思っていない内容を夫に「おっしゃるでしょう？」と聞くのかがポイントである。直前に「意地悪く動く自分の心持を、惨めに自覚しながら」とあるが、何が「意地悪」となるのかを考えてほしい。設問箇所の前の部分の別の会話で夫がどう答えるかを「注意深く」聞いているところもヒントになる。

問九　傍線部の説明を求める問題。幸福に感じていた生活が不安なものに変わったというような、肯定的なものから否定的なものへの変化というのは、ほとんどすべての解答に書かれていたが、それでは不十分。「少くともさよの心の内で」という部分が大事である。夫も生活も変わったわけではないが、それらがどう見えてきたのか、ということを考えてみてほしい。

Ⅱ（配点 90 点）　出典：建部綾足『折々草』

江戸時代中期の文人建部綾足が著した随筆『折々草』より、香道を好むあまりに、夢中になって愚かに思い惑う人のさまを記した一節である。「苦楝樹」に梅を接ぎ木すると黒い梅の花が咲くと聞きつけ、早速やってみることにしたのだが、「苦楝樹」という木がよく分からなくて奔走し、物知りに問い合わせた末に、栴檀に梅を接ぎ木したのだけれども、うまくいかず枯れてしまった。それでもなお、枯れた木の根を削り取って干し、焚いたら

趣ある良い香りがしたので、梅の花の代わりという意味を込めた「梅が代」と名づけ、自画自賛して所持した、というあらすじの話である。香道に「ほれまど」う人が「黒き梅の花」を必死になって求め、試みが失敗してもなお香木に執心する出来事の経緯が叙事的に語られているのだが、その姿は他者から見ると「愚か」に他ならないおかしみがある。

問一　基本的な古語を含む語句の現代語訳の問題。おおむねよくできていたが、Ｂについて、「がり」を的確に理解していない解答が見られた。

問二　（ａ）傍線部を現代語訳する問題。「ゆくりなく」は不意に、突然に、の意。「おはし」は、ここでは「来る」の意の尊敬語。
（ｂ）傍線部のせりふが言い表していることを具体的に説明する問題。京から玉水までの道のりを、たった一時ばかりで走ってきて、汗だくになっている人の様子が、傍線部の直前に記されていることをつかめればよい。香道を好む人が、「苦楝樹」は「あふち（楝）」のことだと聞いて、「あふち」を求めて慌ててやって来たのである。

問三　文中の語句が何を指すかを端的に解答する問題。
①　苦楝樹　　②　あふち

問四　言葉を補って傍線部を現代語訳する問題。「いかに侍らむ」について、接ぎ木をした木はどうなったのでしょうか、といった内容を補ってほしい。ここでの「つと」は、手みやげの意。

問五　「のたまひしごとく」の「のたまひし」が指す内容を説明する問題。香道を好む人が「この木のかたへには童べどもは避きてたべ」と言い、頼んで帰った。その言った内容をまとめればよい。

問六　なぜ「梅が代」という名を付けたのか、その理由を「事の経緯」を明らかにして説明せよ、という問題である。解答のポイントは二点。傍線部以前の本文に記されている「事の経緯」をわかりやすく説明したうえで、「梅が代」という名が、黒い梅の花の代わりという意味を込めた名であることを記してほしい。後者のポイントを押さえていない解答が少なくなかった。梅檀に梅を接ぎ木しても黒い梅ができず落胆したのだが、その木の根を削り取って干し、焚いたら趣ある良い香がした、という事の経緯を記すだけでは、「梅が代」という名を付けた理由の説明にならない。

問七　「梅が代」と名付けた香木を「自ら讃へて」所持したことから、香道を好む人のどのようなさまが表れているか、という問題で、本文全体のまとめとなる設問である。「自ら讃へ」るとは、自画自賛する、自ら誇るの意。二重傍線部の内容を解答に含めながら、本文に記されている出来事も考慮に入れてまとめてほしい。本文全体を読み取ったうえで、この文章が、香道を好んでその道に没頭するあまりに愚かに思い惑う人を描いたものであることを押さえる必要がある。

Ⅲ（配点 75 点）　出典：〔宋〕馬永卿『元城語録』

皇帝の態度が社会の風潮に影響を及ぼす例として、珠をめぐる騒動を紹介した文である。仁宗が外国の商人からの没収品である珍珠を愛でていたとき、そばにいた張貴妃がほしそうなそぶりを見せた。仁宗がそれを買い与えたところ、ほかの妃も珠をほしがり、仁宗の命をうけた係官は珠を民間から買い上げた。そのため世間では珠の値段が高騰することになり、そのことは仁宗の耳にも入った。ある日、内殿で牡丹を鑑賞する会が開催され、仁宗に賜った珍珠を髪飾りにした張貴妃は、わざと最後に登場して珍珠をみせびらかそうとしたが、思いがけず仁宗の不興を買ってしまう。仁宗は妃たちに牡丹を簪にするように命じ、これ以後、後宮では珍珠を身に着けることはなくなり、珠の値段は下落した。作者の意図は、あくまで冒頭の「賢主の言笑顰呻は、以て風俗を移すに足る」であることに留意してほしい。

問一　基本的な読みを問うた。ａ「にはかに」　ｂ「すなはち」　ｃ「これより」
ｂはよくできていたが、ａとｃについては正答率が低かった。

問二　書き下しの問題。「以」は下から返って読む例が多いが、ここの「以」は前段をうける用法である。

問三　現代語訳の問題。「有欲得之色」の「之」は（外国の商人から没収して仁宗が愛でていた）珍珠を指すことを押さえたうえで、「珍珠を手に入れたそうな様子だった」という方向で訳してあればよい。

問四　内容把握の問題。傍線部３の後の句にヒントがある。ただし、注にあげたように「首飾」は「首飾り（ネックレス）」ではなく「髪飾り」である。また、「同輩」とはこの場合、後宮の妃たちを指すことに注意してほしい。

問五　使役形の構文の内容解釈を確認する問題であるが、使役の文型を理解できていない解答が多かった。「簪」はここでは動詞の働きをする。「仁宗が、後宮の女性たち（妃）に（珠ではなく）牡丹の花を髪飾りとさせた」という方向で説明してあればよい。

問六　全体の内容把握の問題。冒頭の「賢主の言笑顰呻は、以て風俗を移すに足る」を踏まえて解答することを求めているので、仁宗の言動と世の風潮との関連に着目して解答してほしい。単に「需要が高まったから」、「需要が減ったから」としている解答は、設問の意図をくみ取っていないことになるため減点した。